

研究ノート

バリの風土と家系についての考察 (バリ〈島〉の歴史) (XIII)

松 原 正 道*

序

三浦襄氏が道案内と通訳としてその先頭に立っているのを見て「トアン・ミウラ・ダタン」(三浦の旦那が帰ってきた)と言い、バリ(島)人が安心を得たために無血上陸が出来た日本軍。

その日本軍と島民との間であって三浦氏は島民のために奔走、やがて、それは、当時の日本政府がそれを容認した事で以て、その独立についての運動の手助けへと発展するのだった。

その点で、三浦氏の存在は当時のバリ(島)人にとって大きく、彼は島民のために心血を注いだのであるが、インドネシア、バリ(島)の独立については日本の敗北によりそれは潰えてしまったのである。

その責任をとって三浦氏は自決してしまうのだが、前稿ではその経緯を探ってみた。

本稿では、そうした三浦氏を培った当時の日本の在り方、それに伴ったその時代の日本の風潮、それを形づくった日本人の心情、気持ち、行動について、オランダ領東インド(蘭印)、インドネシアに関わった人々について触れる事で以て考察を進めようと考えている。

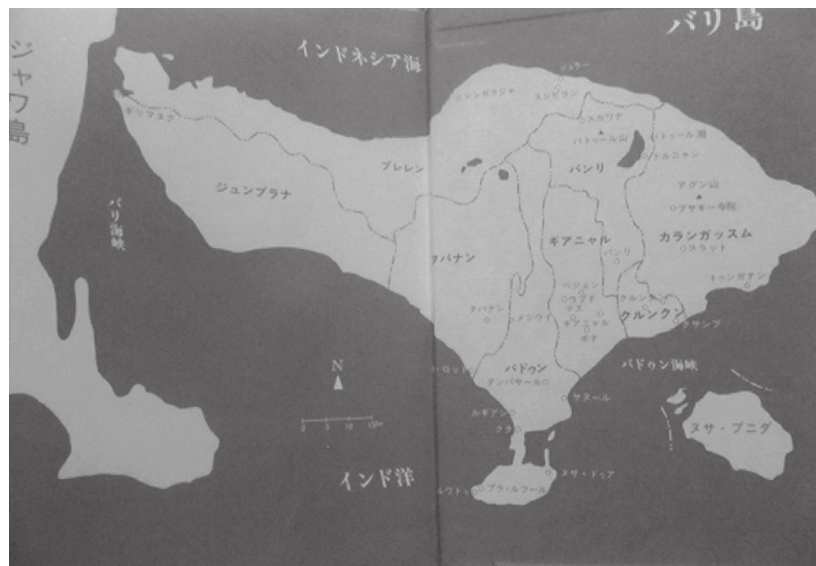


写真1 バリ(島)地図

*淑徳大学名誉教授

I

3家族しか住んでいなかったと言うバリ（島）の日本人の中で、「トコ・スベダ・トワン・ジャパング」（自転車屋の日本人のおじ〈旦那〉さん）と言われ、「トアン・ミウラ」（三浦の旦那さん）として親しまれて、バリ（島）の中心地（州都）デンパサールに一家族だけで住み自転車商を営んでいたと言う三浦襄氏。

ジャワ（島）では日本人学校の充実のための動きがあったと言うが（故宮武重徳「除幕式後の記念講演」 武田重三郎・編『ジャガタラ閑話』 蘭印時代邦人の足跡 昭和43年 9頁）、昭和8年、毎年、夏には帰国するとして、4女栄子の誕生を機に、「子供の教育は、日本でなければならぬ」と家族全員を仙台へ帰し、一人バリ（島）に残るのだった。

そして、そこでの三浦氏の「生きる」については、

「永く永住し、住民を愛し、住民から信頼され、住民の中に溶け込む」
三浦を南洋に導いたクリスチャンの実業家、堤林^{つづみばやしかずえ}数衛が商売の心得を記した「販売所百言目次」にある言葉。

『凜として』191 自転車屋のオヤジ
平成17年（2005年）2月9日 水曜日

と言ったそのものだったと言うのである。

三浦氏はその堤林数衛氏に触発されてインドネシアへ渡ったわけだが、1年を経ずして堤林氏の元を離れ自らの事業を展開するのだった。

そして、その事業については、時に、かなり手広くやった事もあったようだが、色々な経緯を経て、自らは大きく事業をなすのではなく小商売が向いているとして、結局、昭和5年11月にバリ（島）に居を構え、自転車商を営む事になったわけである。

大きく事業を展開していたのとは違い、こじんまりとした商いのためにそれ程忙しくなかったのか、土地の人々と親しく付き合う事が出来るようになるのだった。正に、「永住し、住民を愛し、住民から信頼され、住民の中に溶け込む」と言った生活だった言えるのだろう。

それについては、牧師の家に生まれたクリスチャンとして身に着けたものが大きく作用していると言うのである。

日本キリスト教史が専門の原誠（三浦氏の甥 筆者注）は、「牧師の家に生まれた三浦にとって、キリスト教とは、単なる教義ではなく、血や肉のように体になじんだものだった。だからこそ宗教の壁を乗り越えることができたのではないか」と話す。

同上記事

と。

彼自身に身についた資質、それはプロテスタントのキリスト教に根ざしたものだだったが、そうした基盤を持ちながらも、それを超えてヒンズー教の世界であるバリ（島）、島民の中に溶け込んでいたわけである。

カトリック、プロテスタントの対立を超えたところに彼の存在があったと言うのだろう。

宗教に根ざしていたと言う事から、カトリック、プロテスタントとの間の対立が厳しいと言えるキリスト教の社会ではなく、ヒンズー教と言う異教の世界だからなりたっていたのだとも言えるのだろうか。



写真2 三浦襄氏



写真3 ヒンズー教の聖地アグン山とブサキ寺院

こうした彼のバリ（島）での宗教に関わる点として、

インドネシアの独立をにらんで、三浦がまず取り組んだのは、バリの「宗教改革」だった。クリスチャンである三浦は、ほかの宗教を貶める気持ちはみじんもなかったが、バリ固有の宗教であるヒンズー教には、首をかしげることがあった。

というのは島民のためにどんなに事業を起こして指導したり物資を与えても、島民から感謝の言葉が返ってきたことがないからだ。島民が礼儀を知らないということではない。「施した人には神様がお礼を述べ、

その人に恵みを与えてくれるので、施しを受けた人は礼をいう必要がない」と言うバリ・ヒンズー教の教えから来ているものだった。(中略)

島内各地を回り、バリ・ヒンズー教だけでなく、アラブ人やオランダ人の来訪で流入したイスラム教、キリスト教関係者にも精力的に会った。そして、宗派を超えて、独立に向けて島民の心をひとつにしようと「バリ宗教連盟」(パンディタ ダルマ)を結成した。

『凜として』195 独立へ 平成17年
(2005年) 2月16日 木曜日

と、インドネシアの「独立」と言う立場から各宗教を超えた団結を訴えたわけで、「独立」と言う目的の為には個々の宗教を言っている場合ではないとしたわけがある。

そうした彼ではあるが、親の後を継がずに堤林氏との出会いが若き学徒の心を揺さぶり、卒業を目前にして、「南洋」への雄飛を決意させ、それを実行し、早く離れたとは言え堤林氏の理念を受け継いだとも言える「生きる」を送っていたわけである。

その堤林氏の事については次のような記述がある。

爪哇へ渡航の決意した動機は、私が大正3年県立新庄中学3年生の時、故堤林社長が母校へ来て南方爪哇方面の講演をされたのを聞き、俄然南洋熱に浮かされ早速中学を中退して南洋商会に入社すべく社長夫人に御願に行った処、折角学業中だから2、3年遅れても卒業してから行った方が良くだろうと云われ、大正6年卒業、7年1月社長に連れられ社員13名と共に船内で馬來語を習いつつ爪哇に渡った。

附記 社員の私 大場条太郎「南方先駆者堤林敦衛氏と南洋商会」 武田重三郎・編『ジャガタラ閑話 蘭印時代邦人の足跡』 昭和43年(明治100年記念祭) 88頁



写真4 バリ(島)の結婚式

と。

上記の一文に見られる如く、時代が「南進論」に傾いていたとは言え、事業家として、また、指導者として堤林氏の持つ資質には並々ならぬものがあり、若者の心を打つ情熱は相当なものがあったと言えるのであって、筆者の大場氏も自らの「生きる」を堤林氏に託した一人だったのである。

その点では、三浦氏も同様だったわけである。

そうした堤林氏ではあるが、世界恐慌の煽りを受けジャワでの事業に失敗して、同地を離れるに当たっての別れの挨拶で次の事を言ったと大場氏は言うのである。少し長いが引用する。

私は自分の不明のために商会解散の悲運を招来した事を心から諸君にお詫びする。諸君の絶大なる努力は無に帰した。それは如何にも残念である。けれど人生に浮沈は常である。七転び八起きしながら、成功の彼岸に達するのである。一勝一敗に一喜一憂する如きは大男子のなすべき事ではない。諸君も飽く迄強靱な心構えで奮斗努力し今日の悲運を幸福に導く様にして貰いたい。諸君は私が半生の心血を注ぎ念願をこめた国家的な商会創立の精神をしかと体得し常に創業当時の苦心を惨憺たりし経営の歴史を忘れず、是を学び是を行ない以って茨の道を切開いて行かれない。

熱烈な愛国の諸君は海外に在っても祖国日本に対しては至情を捧げ、諸君の子弟もこの土地に生まれても立派な日本人である事を忘れさせないために、常に祖国の光輝ある2千6百年の歴史を研究し神聖なる国体と皇室の尊厳に絶体の信仰を捧げ、つとめて内地の親族友人と通信せられたい。又、爪哇の平和と原住民の幸福に貢献する様に努力し、その人情、風俗、習慣を重んじ彼等を愛し、相愛しみ同胞の如くに交際し共栄の楽しみを共にする様に心掛けられたい。

同上書 91-2

こうした堤林氏の挨拶の背景にあるものとして、「国歩艱難の国運」と彼が言う日本の国の置かれている立場、そして、それに伴う、そのための「開拓者精神」とも言える心構えを持ち、「日本と『南洋諸地域』との架け橋となる」になる事であるとする堤林氏自身の認識が大きく作用していたわけであり、大場氏は更に続けて堤林氏の挨拶の言葉を記しているのである。

日本の人口は年々70万人の増加で国内に溢れている。日本の工業は日進月歩の発達を遂げているが、その原料がない。日本の文化と生活が驚くべき向上を示してもそれを充たすべき物資が本国にはない。国家の改良も思想の善導も労働問題の解決もこの人口問題と資源問題を措いては解決する事はできない。それには海外貿易と移住の外に方法はないのである。そしてその貿易と移住の第一線に立つ先駆者であらねばならない。先駆者義務と光栄は後進のために開拓と草分けの犠牲と労苦を甘んじて受ける事である。諸君は茨の道を押し分けて進む大勇猛心を以って敢闘しその宝血を海外にそそがなければならない。

同上書 92頁

ここで堤林氏は、狭いと言われる日本の国土、それに伴う人口の増加を危惧して、国家の在り方と、それに伴う日本国民の心構えとして、発達を遂げた工業力のための原料・資源の確保の重要性を言うのであって、そのために人々の海外雄飛を主唱するのである。

そして、自ら、その先兵としてインドネシアに渡ってきたわけである。

こうした日本の現状を国難と取っていると見受けられる堤林氏はその解決策として、工業は日進月歩の発達を遂げ、科学や技術の向上を果した我が国にとって、それを駆使しての貿易の振興を計る事こそが国策の基本であるとするのだが、国内には資源がない。

そうした日本の実情に根ざした国是に従って、資源の確保のために海外進出・移住を提唱し、その責任を一身に担うかのように堤林氏は自ら率先垂範するのである。

当事者としての心構えを示す言葉であると言える。

その辺りの「使命感」、それは三浦氏に受け継がれてもいるわけだが、彼らの「伝道者」に繋がるとも言える心情については、300有余年前、ポルトガルと言う国家の興望を担ってアジア、そして、日本にまで布教の足を伸ばした(1549年来日)フランシスコ・ザビエルのそれに似ていると言えなくもないのである。

そこにはカトリックとプロテスタントとの違いはあり、また、ザビエルと違って堤林氏、三浦氏の場合は国家の後ろ盾はないのであるが。

帰国後、仏教に転向したと言われる堤林氏だが、この時点では未だ、熱心なクリスチャンとして、恰も、「神」の「召命」に従うかのようにインドネシアへ渡ってきていたと言えるのであって、その辺りが三浦氏や大場氏の心情に訴えるところでもあったと言えよう。

こうした強い「使命感」を持っていたと言えるわけだが、強い「使命感」を持っていればいるほど自らの行っている事の正しさを確信し、それを行う事こそ自らの「使命」、「宿命」であるとして行動に駆り立てられる事になるのだが、それを受け入れる事になる側にとっ

て、それが果してこれを「是」と受け止める事が出来るものなのだろうか。

「大航海時代」に雄飛した者達の行動と関わって見ると、そこで活躍した者達は自らが赴いた（「発見した」）地域にあった「文明」を滅ぼし、そこに元々住んでいた人達を奴隸的存在に貶めたのである。

ザビエルのもたらしたものは、それを受け入れた者も多くいたのだったが、やがて、それは我が国に混乱をもたらす事にもなったのである。

この点について、日本人が出向いて行った「南洋」と言われていた諸地域はどうだったのだろうか。インドネシアの場合、日本、日本人の進出は、その後の「独立」との関連から意味があったと言える部分が少なくなかったとは言えないだろうか。

上記の指摘の如くクリスチャンとしての信仰が血や肉のように体現している三浦氏の心情がヒンズー教徒の多いバリ（島）にあって、宗教を超えて島の人々の共感を得たとして「パパ・バリ」（バリの父）と言われていたというのである。

そして、そこには、

遠い何百年も前から南の楽園であった南方へはわが祖先の進出が古く、従って血の繋がりも多かったと思われる。戦前約1万に達した在留同胞は先賢の名誉を重んじ、我国海外発展の為そこに永住の念を以って闘魂傾け炎暑の裡に苦闘した事は、今日の青年諸君には奇異で領けぬ事実かも知れない。

海外に於いては該地の法に生き、一人の邦人と雖も過ちを犯さば祖国を傷つけ邦人全体の面目に関したので、日々緊張の生活であり安易愉安は禁物だった訳である。それだけに各地日本人会は邦人結束の場として、融和、子女教育、運動保健、娯楽各面を通じて日本全体の地位高揚に努めた。

ジャガタラ友の会々長 武田重三郎「ジャガタラ友の会
発足とジャガタラ友愛之碑建立に付て」 同上書 3頁

と言う発言もあるのである。

これは、正に、堤林氏の主張と相通ずるものであると言えるだろう。

そして、これも堤林氏のそれと同様に「南洋」と言われ、その多くが欧米列強の植民地下にあった東南アジアへ、自らの「生きる」を求めて雄飛した者達の心意気とその在り方の規範に繋がるものであると言える。

彼らは自らが日本を代表する者であるという気概を持って、そのためには、その地に骨を

埋める覚悟を持ち、当該地の風俗・習慣、法に従って「生きる」と言う自覚を強く持つ事が大事で、青年達はこうした心構えを持つ事で以て、それぞれの地へと出向いて行ったわけである。

その点では、三浦氏も同様に、一人デンパサルでその範を示す「生きる」を送っていたのである。

このように、同じく啓発され堤林氏に連れられて渡航した三浦氏と大場氏ではあるが、明治42年に渡航した三浦氏と大正6年に渡航した大場氏との接点については、今のところ不明であり、また、武田氏についても。

しかしながら、三浦氏と大場氏との間には7～8年の時間が経っているのだが、この間、一貫して堤林氏は若者達の心を鼓舞していた事が分かるのである。

こうした国策の一端を担うと言った気概を以ての「南洋」進出・雄飛の一方では、人の集まる所に金も集まるとして無頼の徒とも言うべき人間も渡航していたと言う事も必定だった。

II

上記、大場氏の一文に見られる「使命感」に燃えて学業を投げ出して迄もと言う、若気の至りとも受け取られなくはない血気に逸る若者が多くいたのである。

だが、三浦氏、大場氏の場合は堤林氏の元での雄飛だったので、堤林氏の「理念」に従った渡航だったわけであるのだが、血気に逸ると言う側面はなかったのだろうか。

その血気に逸る若者達についての一例として以下のような記述があるのである。

日露戦争直後の一般学生風潮

「簾」でに福島安正中佐の西比利亜横断の壮挙あり。引続き郡司成忠大尉の北辺占守島、白瀬大尉の南極洋探検の挙あり強敵露西亜を一挙にして葬れる我が大和民族の意気軒昂たるものがあつた。当時の一般学生は常に植民政策を論じ、海外雄飛を説き、弊衣破帽甲論乙駁徒に憂国の士を自負する者が多かつた時代である。

雄飛の動機

時恰も明治41年6月、曾我部純一氏により同氏曾遊の地爪哇於いて政治的活動が為しつつある先輩小田登氏と連携、南方一円に亘り政治的、経済的に進出が叫ばれ同志糾合の挙があつた。勿論あわよくば無人島占領を夢想した向きもあつたのは疑を容れない。参加希望者踵を接し60余名、公私立大学卒業生を網羅した。

矢部英夫「赤裸々なわが生涯」武田編 同上書 93-4頁

と言うように。

「南進論」が主唱された時代、堤林氏のみならず多くの人々によって「南洋」への雄飛が叫ばれていたわけで、この一文の寄稿者である矢部氏は曾我部氏や小田氏によって触発されたとして、大学の卒業生を糾合して「南洋」へ出かけて行ったのである。

しかも、彼らはその資金として後に引用する如く、参加者13名が応分の醸金をし、それを共有の財産として活用し、各人の権利を平等とするとしての渡航だった。

その点では、仲々、進んだ考え方を持った者達が集まったと言えるのである。だが、その一方では、

吾人は特殊の目的を以って壮途に就く以上、世間並に旅券の下付を待つは面白くない。この際無旅券にて国外へ脱出すべし、という事に衆議一決、一同郵船東京本店へ参り目下旅券申請中で一兩日中に許可されると思うが、事急を要するため何れ一人後に残り旅券を受取り貴社へ提出するから吾人の切符を前売りして貰い度いと申し入れ、マンマと切符を手に入れ、横浜よりかの日露戦争当初敵艦見ゆの信号を檣上高く掲げ偉勳を立てた信濃丸に乗船、上海を経て香港に到着した。

同上書 94頁

と言う行為を以て、彼らの言う「壮途」に就いたのである。

これをどう考えるかである。時代がのんびりしていたと言うのか、彼らが「壮途」の為に知恵を絞った結果と言うのか。

いずれにしても、大学を卒業した者達はその「壮途」の手始めに、「人」を騙すと言う「不法行為」とも言える事を行う事で以て、「南洋」へ出かけて言ったと言う事であって、そうした彼らからは「冒険」を楽しみに行くと言う事を感じさせられるのである。

現地上陸に際し旅券を持たないと言う事はどうなったのだろうか。

この「不法行為」を行った者達が、後に見るように「無法者」に対して強請りまがいの事を行うのである。

こうした彼らの一事から、「南洋」に渡っていった人達の中に、他にも「不法行為」に類する事を行った者達がいなかったのかと言う疑問が生じると共に、「南洋」に渡った者達には色々な者がいるだと言う事が知れるのである。

そして、矢部氏らは、

(前略) 爪哇に着く。然も岸壁に横付けとなる。船上より見下ろすと

人馬の交通頻繁，車馬絡駅として織るようであり，彼方に汽車の発着駅も見える。その文明程度寧ろ我が国を凌駕するものがあつた。椰子の木陰に裸の土着人が真黒い体で弓矢でも持って歩行しているものとばかり思っていた想像が全く裏切られ，一同啞然とした。

一部の者に「到底この少人数でこの土地を占領できはしない。」との嘆声をもらさせた。

同上書 95頁

と言うのである。

これにより当時の大学卒業者の「南洋」についての知識がどの程度のものだったのかと言う事が分かると共に，この程度の知識で以て渡航していったと言う事に驚かされ，懸念を感じさせられるのである。渡航先の土地を「占領」しようとも考えていたと言うのである。

尤も，この時，図書館にもこの地域についての参考文献は皆無に等しかったと言うのである。

現地の事情については，堤林氏のような先駆者に聞けば分かる事だったにも関わらず，彼らはそれらの者達との接触をした気配を感じさせない上での「壮途」だったわけである。そのために，「文明程度寧ろ我が国を凌駕するものがあつた」とするのである。

そして，現地の文明度の高さについては，後に，「日本占領下」のバリ（島）の教育を担った者が，バリ（島）の道路の素晴らしさと水洗便所が至る所にあつたと言う事で感嘆の声をあげているのである。

これ全てオランダの植民地政策の現われであり，彼らはその事を知る事もなく渡航していたわけである。当時の日本で舗装道路，水洗便所がどの程度普及していたのだろうか。

「弊衣破帽で，榮華の巷を低く見た」，「甲論乙駁，憂国の士を氣負つた」ような一種の高ぶりを持った彼ら大学卒業生達の集まりは，矢部氏自らが記している如く，自分達で考えていた「南洋」像である「椰子の木陰に裸の土着人が真黒い体で弓矢でも持って歩行しているものとばかり思っていた想像が全く裏切られ」た事になったわけである。

当時の大学卒業者は社会のエリートだったわけで，その点では意気軒昂であるのは分かるのだが，この一事を以てして，彼らが世界の情勢について余りにも疎かったと言う事が分かるのである。これは彼らだけの事なのだろうか。

この事は何を意味するのだろうか。太平洋（大東亜）戦争を指導した者達の中にそうした者はいなかったのだろうか。

筆者も子供の頃『冒険ダン吉』を夢中で読み，歌詞に間違いがなければ，「椰子の木陰でドンジャラホイ，しゃんしゃん手拍子，足拍子，太鼓叩いて笛吹いて，今夜はお祭りドンジャラホイ（夢の国？），土人さんが踊って賑やかに，ヤーホイのホイのドンジャラホイ」

と言った歌を謡ったものである。

彼ら大学卒業者が意気軒昂で、後の引用で見る「天下の国土」を気取っていたとしても、こうした浅い知識と若気の至りで以て渡航したと言う事、それは、その後の彼らの行動にも現れるのである。

一方では、堤林氏や三浦氏のような謹厳実直な者もいたわけだが、息抜きの場を求めて「栄華の巷を低く見て」の、その巷に「紅灯」を求めて歩く者もいたと言う事は、「人間」の性（さが）として当然の事だったと言えるのである。

そして、「人」の集まる所「金」も集まると言うのは必定で、そうした「紅灯の巷」こそが自らの金儲けの場であると考え、一攫千金を得るべく渡航した者も少なからずいたのである。

そして、この種の「人間」が金儲けの種とした女性達が、堤林氏のような男性達よりも早く「南洋」へ進出していたと言われているのである。

彼女達の多くが長崎の出身であり、熊本では天草の者が多かったと言う。

これらの地の女性達が何が故に「南洋」へ出かけて行く事になったのだろう。貧しさのためにか。

貧しさもあっただろうが、これら長崎、天草はザビエルから始まるキリスト教の盛んな所であり、隠れキリシタンの時代を経て、今日でもカトリックの信仰が盛んな土地である。このため、古くから南蛮文化に馴染みを持っていたと言えるのである。

そうした事から、南蛮文化、キリスト教伝播の中継地としての「南洋」、東南アジアを身近に感じていたととれる一面をどう考えたら良いだろう。

彼女達は、自らの意志で以て、また、女衞のような者に騙されて東南アジア諸地域、「南洋」に出かけていったのである。山崎朋子氏が著わした『サンダカン八番娼館』に登場する女性達のような者が多くいたのである。

一方で、そう言う女性達を利用しながらも、こうした女性達の存在を「国辱的」だと言う者もいると言うのが現実だったのである。

小説や映画の中では、そうした女性と一夜を共にした事を後悔すると言った、長塚節の『土』の主人公のような者、また、女性に対して侮蔑的な言辞を弄する男性の姿が取り上げられるのだが、それが男の性（さが）か。



写真5 大江天主堂（天草）

日清戦争前後から多数の婦女子が、主に長崎港を経て香港、上海、シンガポール更にスマトラ、爪哇等へ、悪漢たちの魔手奸計によって誘拐され、悲惨な運命を辿って流転した事は、誠に国家的恨事であった。シンガポール当局はこれら醜業婦の激増に対し、取り締り上措置に窮し日本政府に対し早急に引き取り方を要請してきた。日本政府は急遽領事館を開設し、本問題の解決に当たった。その最大部分は内地に送還されたが、尚相当数は奥地に渡り、或はスマトラや爪哇等に脱出し、そのうち恵まれたものは蘭人の官吏や軍人の恩給生活者の妻妾となり、他の不運な者は中国人や原住民と結婚又は同棲した。その姿はバンドン地方に多く見られ、チリポン近くでも発見した。

新井国美「チリポン地方に於ける日本人発展の歴史的考察」 屈辱的な娘子軍の南方流出 同上書 146頁

と新井国美氏は言うのである。

こうした女性達の存在を放置している事を「国家的恨事」と新井氏は言うのだが、「一等国」を以て任じる日本にとってこうした認識は至極あたりまえの事であると言えるのである。

そうした中で、同氏は彼女達の下記のような行為も記しているのである。

その後10数年して日本軍艦がシンガポールに寄港した際、在留邦人の歓迎会があり、一海軍将校がその奉加帳を見たら、上位寄付者の中に女性の名前が沢山あるのを発見、不思議に思って調べた処、前が判明して大いに驚いたそうである。

同上書 146頁

と。

これをどう考えるかである。

「雄飛」と言うには淋しく悲しいが、日本人の海外進出の先兵となった彼女達が「国辱的」等と言われながらも、祖国日本の軍艦の寄港に際して、その愛国心を発揮したとも言える行動に出たのである。それも上位寄付者として。

身は異郷の地にあり醜業に携わっていたとは言え、彼女達も日本人で愛国心の持ち主だったわけである。

そして、そうした彼女達について、また、

又、その後戦雲急を告げ、引揚船がバタビヤから出港した際、船内に老齢の婦人達が数多く見受けられたが、その人達こそ末路悲しい彼女達の姿であった。よし余儀ない事情からからとはいえ、繊弱な女性の身で日本男子に先駆けて南進した悲壮な行蹟は、日本民族の海外発展の哀史として是を書き残しておきたい。

同上書 166 - 7頁

とも言っているのである。

そうした彼女達には、堤林氏、三浦氏に見られる「南洋」に雄飛した人々が日本の国を代表して海外へ出ているのだと言う気概を持っていたのに対して、そうしたものがあつたとは思えないのだが、軍艦寄港時の上位寄付者としての一事からも、彼女達なりの心意気があつたと言う事は言えるのである。

そして、こうした気概、意気込みはこれ迄引用してきた『ジャガタラ閑話』に寄稿しているインドネシア在住経験のある者全てが、大なり小なり持っていたと言う事を感じさせられるのだが、そうした渡航者から批判を受けるような者も少なからずいたのであつて、そうした者について新井氏は次のように言うのである。

広域南進の先駆者は、遺憾乍ら可憐な娘子軍であつて、これに続いた男子は賭博本業の吹き矢の連中であつた。誠に不名誉な事ではあるが、厳然たる事実であるから、恥を忍んで敢えて冒頭にこれを記述する事にした。

同上書 146頁

と。

女性達の後に続いて渡航したのが、「賭博本業の吹き矢の連中」だつたと言うのである。その点について、更に、次のように言うのである。

チリボン市周辺には邦人の有力な吹き矢（文廻しく縁日・夜店等で、番号なり商品名を書いた板の上で矢形を回して、矢の先が止まった所の品物を賞品として貰えると言うもので、はずれもある。筆者注>、その他の賭博行為）の親分が根を下していた。その関係で配下の者達常時多数出沒していた。是等の人々は各地のお祭りや人の集まる盛り場を捜し、有望な場所が見当たると、所轄当路の郡長、又は村長等に開演の認

可を申請し、目的達成のためには執拗な運動を強行し、殊に独占を狙う場合には仲間同志が反目、鬭争も辞さないばかりか時には相手側の秘密仕掛の内容を暴露する事さえあった。元来、賭技に使用する道具類は何れも巧妙な仕掛が施されてあって、賭の当落は胴元の手で自由に加減する事ができる。これを知らない純真な住民達は、生来射幸心が強く易々と魔手に躍らせられ、上気して挑戦を続け、気づいた時はオケラに転落してしまう。茫然たるその姿を目撃する毎に、吸血鬼にも似た非情な行為がわが同胞によって敢行されている事実に対し、深く慙愧に堪えなかった。

同上書 147頁

と。

こうした自らの「利」のみを追う者達、彼らの中にはその「利」の為に日本人同士で争う事もあったと言うのである。正に、「国辱的」である。

そうした者達の中に「娘子軍」をなす女性達を仕切っている者がいたのであって、そうした者達に対して、若さをそのままに出した大学卒業者達は、正義感からと言えなくもないのであるが、ある意味、前後の見境もない行動に走るのだった。

娘子軍退治

新架坡に於いて我らを最も驚愕させたのは所謂娘子軍の存在である。その数4千人と称せられ日本着物に下駄と云う闊歩姿は是が異国と疑われる程で、彼等は長崎県新架坡と平気で称え、市内の顔役神戸新、矢ヶ部、二木等の人々の配下に夜の町を賑わせていたが、吾人天下の国土を以って任ずる以上、何ぞ斯かる国辱的存在を看過できよう。(中略) 先ず斯の種国辱の一掃より着手しようと衆議一決した。それで山の手に80弗で宏壮なる邸宅を借り受けて移住し、一同また柔剣道何段の猛者なる事を市内に宣伝した。(中略) 前記顔役はチーハーと云う一種の賭博の元締めをやって莫大な収益を挙げていたが、これを政府に告発されると所払い(追放)される規定であった。斯くする事半月、先ず神戸新(60才位の容貌魁偉の人)宅を尋ね我々は天下の国土を以って任ずる者であるが、仄聞するに君は娘子ぐんを抱えチーハーを弄びおるとか甚だ不都合ではないか。若し吾々に軍資金を寄付すれば黙認するが不承知ならば政府に告発するがとした処が幾何出せば良いかとの事で、千弗出せと

言ったら承知したので引き揚げた。次に又、二木と矢ヶ部の処へも行って同様の交渉をした処、一応考えさせてくれとの事、大体大丈夫と思ひ、或る日の事二階で小宴を催していた処、いきなりガタガタと下駄ばきの破落戸が10数人抜剣で裾を捲って上がって来た。僕も刀の峰打ちを食らわされて逃げ出し、英国人のコック部屋に二日隠れていた。

矢部 同上書 96-97頁

と、先に渡航しており、既に現地で顔役として活躍(?)している者に対して強請りをかけると言った、顔役の者達まがいの事を行いながらも尻尾を巻いて逃げ出すと言う事を行ったわけである。この一文で筆者も「娘子軍」を「国辱」と言っているのである。

この一件は、そうした彼女達を食い物にしている顔役達の行為を「天下の国土」を任ずる彼らとして、これを黙視し得ないとする理由によると言えるのと、自らの「冒険」のための軍資金稼ぎと言う事を感じさせられる行動だったと言えるわけだが、相手の方が役者が一枚も二枚も上で、事は思惑通りに運ばなかったどころか、命の危険さえも感じさせられるものだったのである。正に、若気の至りか。だが、正義感は感じられる。

こうした彼らについては、当事者である矢部氏の「日露戦直後の一般学生風潮」に従うと、

参加希望踵を接し60余名、公私立大学卒業生を網羅した。然るに当時の国内事情は南方に対する知識皆無と言うも過言ではなく、上野図書館蔵書中馬來語に関するものはわずか2冊、三井物産に就いて尋ねた処、爪哇は砂糖と塩の産地である云々の説明が与えられる位いのもので、欧州との往復通路を外れた旧蘭印の地域は茫漠鬱蒼たる密林に覆われた道の世界として不省地方であった。一部先見有識者が売薬、雑貨、旅館等を経営して折るのを知ったのは後日の事である。(中略) 60数名の希望者中比較的優秀なる人物を物色13名を選抜し、各自応分の旅費を自宅から持ち寄る事とした。即ち人によっては60円乃至千円とその資力に応じて醸金したが、同一目的を以って今後行動をする事となった以上全部一括し、団体の所有財産とし各人の権利を平等とした。

同上書 94頁

と言うように、醸金を団体の所有財産とすると言った点では進歩的・理想的なものを持っていたと言う事を感じさせられるのだが、現実に対する無知とも言えるものであって、その意気込みは壮たるものがあるが、時代の風潮の「熱」に、若さ故に浮かされたと言う側面

を感じさせられるのである。

こうした若さ故の「熱」に浮かされた行動はその後にもみる、「五・一五」、「二・二六」事件に繋がるとも言えるのであって、それぞれの根底にあるものは国を思う心と正義感だったのである。この大学卒業の若者達も無邪気だったとは言えるのだが、それが間違った方向へ行くと恐い。

この事から、この時、既に現地には顔役になっていた日本人が何人もいたと言う事が知れるわけである。

この一文の話が何時であるか定かではないが、文中に、明治41年と言う記述があるのでこの頃の話と推測できるだろう。三浦氏の渡航は42年だった。

この一例でも分かるように、堤林、三浦氏達の対極にあるとも言える日本人も「南洋」に「雄飛(?)」していたと言う事が知れるのである。

こうした「南洋」の在り方の中で三浦氏は昭和16年夏にも帰国したのだが、日米の関係が険悪化したため、これを憂慮したオランダは日本の南進策を警戒して、オランダ領東インド総督府が日本人の資産を凍結したために、バリ(島)にある三浦氏のそれも同様の措置をうけるのだった。

間もなく、太平洋(大東亜)戦争が勃発したために、彼は帰島を断念せざるを得なくなったのである。

そうした経緯の中で、海軍軍令部から、バリ島攻略の際の道案内と通訳を命じられるのだった。

昭和17年2月19日未明に日本軍がサヌール海岸に上陸すると、これに対応した軍の要請に基づく道案内兼通訳として協力するのである。

こうした日本軍の上陸に不安を持ったバリ(島)の人々もその中に三浦氏の姿を見ると安心をし、「トアン・ミウラ・ダタン」と言い、三浦氏が帰ってきたとして抵抗する事なくこれを受け入れるのだった。無血上陸の蔭に三浦氏の存在があったわけである。

従って、

「トワン・ミウラ・ダタン」という言葉は、このあと日本軍がバリ島内を占領していく過程で、島民の合言葉になっていく。

『凜として』 192 解放 平成17年(2005年)2月10日 木曜日

と言われる如くに、三浦氏の存在は、バリ島民にとって安心を与えるものであり、かつ、一つの象徴のようなものだったとも言えるのである。そのために三浦氏は島民と日本軍との間の緩衝の役割、または、独立のそれに擬せられる、バリ(島)人の統合の象徴的な存在とも

なっていたと言えるのである。

自らの静養のために帰国をしている間に軍からの接触を得て、バリ進攻の際の協力を要請(命令)されていたわけである。

こうした三浦氏の協力を得て無血上陸を果す事ができた日本軍ではあったが、翌日の米・豪連合軍の空爆により護衛の軍艦、輸送船に損害が出るのである。

三浦氏は日本軍とバリ(島)人との間に立って島民の立場を擁護して立ち働いたために、日本軍、中でも、陸軍憲兵隊、海軍特別警備隊(トッケイ 特警)によるバリ(島)人に対する厳しい対応があったと言われてはいるものの、他所の地域では多く見られた、戦後、戦争犯罪人として死刑になった者はおろか、戦争犯罪人も出なかったと言うのである。

因みに蘭印関係に於て現地で戦犯として死刑執行された方は285名で
哀れ戦争の犠牲として不帰の客となったのである。

石居太楼「戦時下の旧在留邦人」武田 前掲書 304頁

とされているのである。

この事を以て、バリ(島)における日本軍の在り方がわかるのである。そして、そこに三浦氏の努力と苦労があったわけである。

当時の民生部の長官だった越野氏によって、

戦局の目覚しい進展とともに転進し来り、転進し去り行く陸上部隊、
航空部隊の鼻息は誠に当たるべからざるものがあり、ずいぶんと無茶も
やれば、無茶無体もしでかしたことはいなむべくもなかった。

越野菊雄「バリ島に眠る三浦襄翁—インドネシア独立
の蔭に一」インドネシア協会『月刊インドネシア』

第118号 昭和32年 6頁

と記されてもいるのである。

そうした中で、日本の後押しを得てスカルノ氏等によって行われていたジャワ島での独立運動に呼応して、バリ(島)でもそれが行われるようになり、三浦氏もそれに手を貸して奔走し、先に見た「宗教改革」を手がけるのだった。

だが、日本の敗戦によってそれを果し得ずに終わってしまい、そのために、彼はその責任をとって自決をするのである。

筆者旧知のタバナン (県), クランピタンの旧領主 (地主) オカ・シラグナダ氏は「ハラキリをした日本人がいた」と言っていたが, どうもそれは三浦氏の事のようなのだが, オカ氏自身は三浦氏とは関わりはなかったようである。

一方, 同じく旧知のドクター・グデ・グリアは子供の頃三浦氏に可愛いがられたと言っていたが, 「産経新聞社」による三浦氏を扱った特集『凜として』の情報提供者として登場するのである。

長くはなるが, 同紙に載っているドクター・グデ・グリアについての文章を記してみる。

市内一の繁華街, ガジャマダ通りの一角にあった三浦商店には日本製はじめ各国の新品の自転車が並び, 南国の日を浴びてまばゆい光をばなっていた。

自転車は当時, 牛一頭とほぼ同額の高価なものだった。高嶺の花とわかっていながら, あきらめきれずに, 毎日小学校の帰り道に立ち寄り, 店内を見つめる少年のすがたがあった。

現在, 故郷のバリで悠々自適の生活を送るグデ・グリア (79) はその日のことを昨日のことに思いだすという。ある日, グリアが農業を営む父親と二人で三浦商店の前を通っていると, 三浦が店内から手招きしていた。そして店の外に止めてあった中古自転車を指さした。「あれをあげよう」

「本当にびっくりした。自転車をもらい父と二人で一緒に帰宅しました。その帰り道, 父とかわりばんこにハンドルを持ち替えては約7キロの道を歩いて帰りました。あまりうれしくて, もったいなくて乗ることなどできなかった」

グリアはたどたどしいながらもしっかりした日本語で話す。

その後, グリアは三浦の家にたびたび立ち寄るようになり, そのたびに三浦から, 「ブラジャー」(勉強しているか) と声をかけられた。

「三浦さんは, 大人だけではなく私たち子供にもよく話しかけてきた。語気は強いのだが, 不思議と親しみの持てる人だった」

グリアは戦後, インドネシアの国費留学生として, 名古屋工業大学で学び, 東京大学で工学博士号を取得, 長くインドネシア賠償使節団で働いた。バリに帰ってからも, 大の日本びいきである。

『凜として』 191 自転車屋の親父として
(平成17年<2005年>2月9日 水曜日)

と言うように、幼き日のドクター・グデ・グリアの思い出であるが、こうした三浦氏との関わりが彼をして日本との繋がりを持たせたと言えるのであって、「大の日本びいき」と言われるのだが、筆者もバリ（島）を訪れるとドクター・グデ・グリアと会い、色々と話をしたものである。

息子のナタさん、その妻のモルニンさんと愛娘も上手な日本語を話し、夫婦して観光の仕事に携わり日本と関わっていたのだが、惜しくもナタさんは父、妻、そして、愛娘を置いて先立ってしまったのである。

今日でこそ自転車は消耗品であり、時に放置自転車は地域、或いは、社会の問題になっているのだが、戦前、戦中、また、戦後においては家族にとっての貴重品、宝物であり、筆者も10代の後半の頃中古の自転車を買った時は天にも昇るうれしさだった事を昨日のように思い出すのである。

こうして家族をあげて日本びいきとなったドクター・グデ・グリアの一族、その背景には三浦襄氏の存在が大きく関わっていたと、同氏は言うのである。

因みに、同特集の『凜として』の題字を書いているのが、愛娘を北朝鮮に拉致されたと言う横田早紀枝さんなのである。

結

以上、三浦襄氏が堤林数衛氏の指導でインドネシア、当時のオランダ領東インド（蘭印）に渡り、やがてはバリ（島）に定住してバリ（島）人から「トアン・ミウラ」と言われて親しまれるようになるのだったが、それとは別に、自らの冒険心、更に、「利」の為に「南洋」に渡航して行った者もいたわけである。

本稿では、特に、堤林氏や三浦氏の対極にあると言える、そうした「私欲」とも言うべきものを持って渡航した者達に焦点を当てて考察した。

こうした彼らの渡航の背景にあった当時の日本の「国是」とも言うべき「南進論」、これによって、その頃、「南洋」と言われていた東南アジア諸地域に渡っていった者達は現地の人々にどう受け取られていたのだろうか。

時に、時代の風潮に浮かされて日本を飛び出して「南洋」へ進出していった者達、そこに



写真6 日本人の知人達と歓談するグリア氏（左端）

は若い学徒も多かったわけだが、彼らの若さの故の行動、失敗、また、そのための正義感がこれらの地でどう受け止められたのだろうか。

失敗しはしたが堤林氏のような強い「使命感」を持って渡航した者とは別に、金儲けのために、時に、非合法に、そして、自分達の「利」のために女性を利用した者達もいたわけである。

しかし、それら「南洋」での出来事は、全て、戦争、そして日本の敗戦により元の木阿弥と帰ってしまったのである。

だが、この日本の敗戦により、その支配下にあった「南洋」の諸地域ではこれを機にして独立のための運動が活発となり、それぞれはそれぞれなりに目的を達成するのだった。

個人として出かけて行き、その「生きる」がどうであれ、また、軍人として「南洋」へ出向いて行った者であれ、それぞれの間人はそれぞれなりにその独立に関わるのであって、インドネシアではそのために帰国する事なく同地に眠った者も少なからずいるのである。バリ(島)でも。

参考文献

- (1) 矢野暢 『「南進」の系譜 日本の南洋史観』 千倉書房 2009
- (2) 歴史群像シリーズ 決定版『太平洋戦争』「南方資源」と蘭印作戦 WORLD WAR II PACIFIC THEATER 1941-1945 Vol. 3 Gakken 2009
- (3) 小林英夫 『「大東亜共栄圏」と日本企業』 社会評論社 2012
- (4) キーン 角地幸男訳 『日本人の戦争』作家の日記を読む 文芸春秋社 2009
- (5) 西岡香織 『アジアの独立と「大東亜戦争」』 芙蓉書房 1996 (19)
- (6) 執筆者代表 岸幸一 『インドネシアにおける日本軍政の研究』(早稲田大学大隈記念社会学研究所) 紀伊国屋書店 昭和34年
- (7) 鈴木政平 『日本占領下バリ島からの報告 東南アジアでの教育政策』 草思社 1999
- (8) 林英一 『残留日本兵の真実<インドネシア独立を戦った男たちの記録>』 作品社 2007
- (9) 坂野徳隆 『サムライバリに殉ず インドネシア独立戦争の英雄になった旧日本兵の記録』 講談社 2008
- (10) 北影雄幸 『無念の涙』BC級戦犯の遺言 光人社 2008

Research Notes

The Social Climate and Lineage in Bali (The History of Bali 〈Island〉) (XIII)

MATSUBARA, Masamichi

In this essay, I researched the people to abroad to South East Asia, especially, Dutch East Indies from Japan to get a job or for bussiness.

One of them was the people like Tutumibayasi Kazue and Miura Jou who worked eagerly with storong will as same as missionary to present Japanese national prestige.

Another one was unprepared people to abroad, contrary. Some of them were the youth shortly afterward graduated university. So, They have imcomplete knowledge to abroad, therefore, they met failure in their action.

Moreover, some of them went abroad to South East Asia to get a money illegally with gambling, contoroling prostitution etc.